

これで身につく！ 感染症まるごとスタートダッシュ 感染症トライアングルと抗菌薬マップで 全体像を一気につかむ

中西 雅樹 編

＜書評者＞ 笠原 敬（奈良医大教授・感染症内科学）

私は決して、最初から感染症が得意だった訳ではありません。むしろ研修医のころは微生物が苦手な、名前は知っていても、そいつが一体どんな「ヤツ」なのか全くイメージできませんでした。「この菌にはこの薬」という断片的な暗記に頼り、ひどいときには「こういうシチュエーションではとりあえずこの抗菌薬」という、今思えば最も避けるべき処方をしていました。

そんな私を救ってくれたのは、ある製薬メーカーが配布していた薄い冊子でした。そこには、どんな状況でどんな菌が出やすく、その菌にどんな特徴があるのかが、ほんの少しだけ書いてありました。当時、そのささやかな情報にどれほど助けられたかわかりません。本書につづられている「感染症診療とは、そうした微生物の個性を見抜いて最適な対処法を選ぶ、人間観察ならぬ『菌観察』なのです」という一節を読み、当時の感覚が蘇りました。

編者の中西雅樹先生は、同じ関西の地で長年にわたり感染症診療

や教育の普及に共に邁進してきた、大切な「仲間」です。そんな中西先生から本書をご恵贈いただき、ページをめくった瞬間に思わずうなりました。「ああ、これは僕も書きたかった（そして挫折した）構成の本だ！」と。

本書の最大の特徴は、「微生物・抗菌薬・臓器」の三者のつながりを立体的にとらえる「感染症トライアングル」という一貫したコンセプトです。まずは日々の臨床で、検査結果に出てきた「菌の名前」を入りに本書を開いてみてください。例えば黄色ブドウ球菌のページを引けば、その「最凶のフルスペック」な性格と、それが狙う臓器、そして立ち向かうための武器が一目で把握できます。

最初から通読する必要はありません。目の前の患者さんから出た菌を「つまみ食い」するように調べていく。関連する抗菌薬や感染症のページも少し目を通して、少しでいいから線を引いたり、日付や思ったことを書き込んでみたりする。それを繰り返すうちに、バラバラだった知識が自分の中で

自然と線になり、いつの間にか「この菌なら、あの臓器とこの薬だ」とトライアングルが頭に浮かぶようになるはずです。

「感染症診療は感覚ではなく論理だ！」

中西先生が説くこの論理を、楽しみながら身につけられるのが本書の醍醐味です。目の前の患者さん一人ひとりと向き合う際、漫然とやり過ごすのか、その都度この本を確認するのか。その小さな積み重ねが、皆さんの診療の質を劇的に変えてくれるでしょう。

本書は、感染症という広大な世界へ足を踏み入れる皆さんに贈る、最高の「冒険の書」です。最初の一步を確かな確信に変えていってくれる一冊として、自信を持って推薦します。

● B5 頁 240 2026 年 1 月
定価：3,960 円
（本体 3,600 円＋税 10%）
[ISBN978-4-260-06282-4]
医学書院刊